

高校生の教育期待形成における文化資本と親の期待の効果：「文化資本」概念解体の提案

荒牧, 草平

九州大学大学院人間環境学研究院教育社会計画学講座：准教授：教育社会学

<https://doi.org/10.15017/25349>

出版情報：大学院教育学研究紀要. 14, pp.97-110, 2012-03-26. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門

バージョン：

権利関係：

高校生の教育期待形成における文化資本と親の期待の効果

「文化資本」概念解体の提案

荒 牧 草 平

1. 文化資本論再考

1.1. 文化資本の相続=社会化説の限界

教育達成の階層差 (Class Differences in Educational Attainment: 以下, CDEA) を説明する社会学的理論としては, いわゆる文化的再生産論, なかでも Bourdieu (Bourdieu et Passeron 1970=1991; Bourdieu 1979=1990) の文化資本論が重要であるとみなされてきた。なかでも, 「身体化された文化資本」は, ハビトゥス概念とともに Bourdieu 理論の核をなすと考えられる。しかしながら, 日常的な相互作用を通じて半ば無意識のうちに子どもに伝達されるという, 長期に渡る社会化過程を念頭においているため, 直接的に観察することは不可能である。したがって, これを質問紙調査によって把握するのは非常に困難であるが, 言語資本やその伝達を測定したり (藤田ほか 1987; 吉川 1996など), 芸術・読書文化資本への接触や慣習行動などから, それらの伝達を類推しようとする意欲的試みがある (片岡 2001; 片瀬 2004など)。

このうち, 大学生や成人を対象とした調査データに基づく, 藤田ほか (1987) や片岡 (2001) は, 理論に肯定的な結果を報告しているが, 中高生とその親を同時に対象としたデータに基づく, 吉川 (1996) や片瀬 (2004) は否定的な結論を述べている。前者の検討はより間接的であり, 示された分析結果も部分的な相関の指摘に留まることを考慮すると, 理論を強く支持する実証的結果は得られていないのが現状である。

日本における選抜の仕組みを考えても, Bourdieu の理解が妥当する範囲は限定されるように思われる。フランス等のように階級文化が相対的に明確な社会で口頭試問などの対面的な審査が重視される状況であれば, 言葉遣いや仕草などの身体化された文化資本が選抜での優位性に関わるという説明も納得できる。しかし, 何よりペーパーテストによる学力評価が重視されており, 測定される学力自体も断片的な知識の記憶に依存する部分が大きい日本の選抜の仕組みを考慮すると, そうした特徴が選抜結果に直接に関与するとは考えにくい⁽¹⁾。したがって, 文化資本の身体化は, 少なくとも日本社会の CDEA 生成メカニズムにおいて, 決定的に重要な役割を果たしてはいないと判断できる。

ただし, この結論は文化資本の効果自体を否定するものとも限らない。第1に, 実証研究においても, 客体化された文化資本と教育達成の間には相関が認められている。これについて, 従来の研

究は、そうした文化資本が子どもに伝達され（ハビトゥスの形成）、学力の差異として現れる側面、いわば文化伝達（社会化）の側面にのみ着目してきた。しかしながら、親の文化資本は、そうした社会化を経由せず、直接的に効果を持つ可能性もある。実際、2005年SSM日本調査のデータを分析した荒牧（2011）は、他の主要変数を統制しても、文化資本が進路選択時に「直接効果」を持つことを指摘している。あくまで社会化論の枠組で論じられてきた文化資本の効果に関する従来の知見も、文化資本の「直接効果」に焦点をあてることによって、再解釈できる可能性がある。

1.2. 補助線としてのウイスコンシン・モデル

こうした観点からの再考を進めるにあたって、ウイスコンシン・モデルの成果に触れておくのも有効だと考えられる。それは、ちょうどBourdieuが文化的再生産に関する研究を行っていた頃、ウイスコンシン大学のグループによって精力的に行われた地位達成研究の新しい試みを指す⁽²⁾。彼らは、Blau and Duncan（1967）のいわゆる地位達成モデルでは不問に付されていた、「重要な他者」などの社会心理的要因による教育アスピレーションの形成こそが重要であるとの認識に基づき、縦断的データを用いて実証的な研究を積み重ねていった。ここで「重要な他者」の効果とは、親や教師が大学進学を期待したか否か、および大半の友人が大学進学を希望したか否かの回答による合成指標の効果を指し⁽³⁾、これが主として本人の教育アスピレーションを経由して、教育達成につながる事を実証的に示した点がウイスコンシン・モデル（Sewell et al. 1969；Sewell et al. 1970）の最大の貢献と言える⁽⁴⁾。

ただし、片瀬（2005）のレビューにも示されているように、ウイスコンシン・モデルには様々な批判も寄せられた。とりわけ問題視されたのは、「重要な他者」等の社会心理的な媒介変数の影響を強調することで、親の社会経済的地位等の構造的制約や選抜制度の影響を相対的に軽視している点であり⁽⁵⁾、時代とともに前者に比べ後者の影響が増大してきたと指摘する研究も現れた（Wilson and Portes 1975）。また、Kerckhoff（1976）は、「願望（wishes）」や「野心（ambition）」の社会化という観点から教育アスピレーションをとらえることに異議を唱え、これらはむしろ、地位達成過程における様々な構造的拘束をふまえた、現実的な「計画」や「期待（expectations）」と考えるべきだと主張した⁽⁶⁾。こうした批判がなされた背景には、「競争移動」（Turner 1960）の行われる平等なアメリカ社会において、個人のアスピレーションに基づく主意主義的選択が行われている、とするウイスコンシン・モデルのイデオロギ的背景に対する批判的な認識もあった（片瀬 2005）。

こうした批判もふまえ、本稿の関心に照らしてウイスコンシン・モデルの知見を整理すると以下のようなになる。①親の教育期待を中心とする「重要な他者」が子どもの「教育アスピレーション」に強い相関を持つ。②ただし、「教育アスピレーション」として観察されたものは、ウイスコンシン・モデルで想定されたような、役割取得やモデルの模倣によって形成された「願望」や「動機づけ」というよりも、様々な構造的拘束もふまえた現実的期待である可能性がある。

2. 分析枠組

2.1. Boudon の IEO モデル

上記の知見や議論を再整理するにあたって、ここでは Boudon (1973=1983) の提示した IEO モデルに着目したい。これは CDEA が「文化的遺産のメカニズム (1次効果)」と「社会的位置に応じた決定のメカニズム (2次効果)」という2段階のメカニズムによって生じるとする枠組のことである。ここで、1次効果とは階層ごとに学業成績等の分布が異なること (上記の文化伝達の側面) を指し、2次効果とは成績等が同じでも階層によって進学率等が異なることに対応する。Boudon のモデルの意義は、たとえ1次効果による学力形成の階層差が解消したとしても、2次効果によって大きな階層差が生じ得ることを明らかにし、2次効果の重要性を主張した点にある⁽⁷⁾。

なお、「文化的遺産のメカニズム」という呼称に現れている通り、文化資本の効果としては1次効果のみが想定されている。また、2次効果として想定されたのは、社会的位置に応じた合理的選択のメカニズムである。これに対し、本稿は、あくまで1次効果と2次効果の区分を中心とした影響経路の整理という観点から、IEOモデルの発想を借りているに過ぎず、Boudonの理論に全面的に依拠しているわけではない。その点をふまえた上で、この枠組に即して言うなら、文化資本の効果に関する先行研究の視点は、Boudonと同じく、学力や言語資本に対する1次効果にほぼ限定されていたと言える。これに対し本稿は、文化資本が2次効果として進路選択時に直接的に関与する側面に着目しようとするものである。

2.2. 分析枠組

この枠組を適用して、前節での議論を整理したのが図1である。

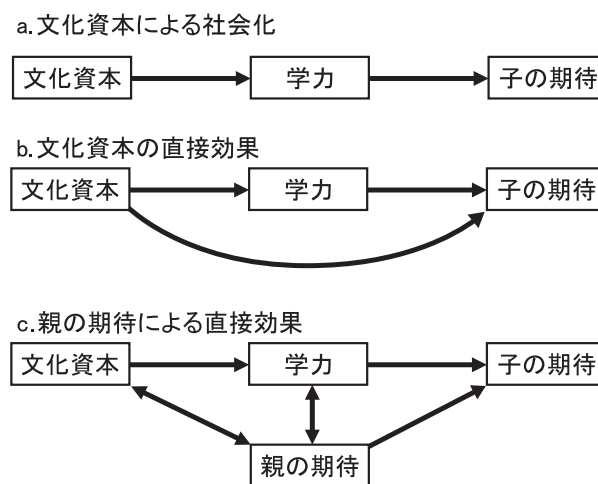


図1 子どもの教育期待形成における文化資本と親の教育期待の効果に関する3つの見方

上段の「a. 文化資本による社会化」は学力の社会化に注視した従来の枠組を示したもので、親の文化資本が子どもに伝達されて学力が形成され、それが子の教育期待を規定するという直線的な関連が想定されている。中段の「b. 文化資本の直接効果」は、荒牧(2011)のように、学力形成を経由しない文化資本の直接効果に焦点をあてたものである。他方、下段の「c. 親の期待による直接効果」は、先のウイスコンシン・モデルの検討も考慮し、子どもの教育期待に対する文化資本の「直接効果」として観察されるものが、主として親の教育期待→子の教育期待という道筋で影響していると想定したものである。ここで親の教育期待は親の文化資本や学力とも相関しているのので、親の教育期待を考慮しなければ(モデルb)、文化資本の直接効果が観察されることになる。

以上の考察をふまえ、本稿では、学力の社会化を経由しない「文化資本の直接効果」と「親の教育期待の効果」に着目しながら、高校生の教育期待に対する家庭の文化的背景の影響に関する複雑な関連性を実証的に解明することを通じて、CDEAの生成メカニズムを解明する手がかりを得ることを試みる。ここでの仮説は以下の2点にまとめられる。

- ①文化資本の効果としては、従来、長期に渡る日常的な相互作用を通じた学力等の形成(社会化)だけが着目されてきたが、文化資本は子どもの教育期待に直接的に作用している。
- ②文化資本の直接効果として観察されたものは、主として親の教育期待(ウイスコンシン・モデルで言うところの「重要な他者」の効果)を反映したものである。

3. データと変数

3.1. データ

分析に使用するデータは、東北大学教育文化研究会が実施した『教育と社会に対する高校生の意識－第6次調査』(2007年実施)の結果である。この調査の最大の特長は、高校生とその保護者(父母)の3者を対象として実施されている点にある。本稿の鍵となる3者の教育期待や文化資本に関する質問項目も含まれており、他にほとんど例のない貴重な調査データとなっている。

調査対象は、東北大学教育文化研究会が過去に実施した調査と同様、仙台圏(名取市と多賀城市を含む)の全ての高校を、公立・私立、共学・別学、普通高校・専門高校などの基準によってグループ化した上で、できるだけ全体の縮図となるよう層化三段抽出法により抽出した、仙台圏にある12の高校の2年生とその保護者(父母)である⁽⁸⁾。また、調査対象となるクラスは、各校の協力者と協議の上、原則として3クラス、学科が分かれている高校は各校の学科構成に配慮しながら4クラスが抽出されている。

高校生は自記式集合調査(場合によっては自記式配票調査)、保護者(父母)は自記式配票調査による。有効回収数と回収率は、高校生が1,231人で79.47%、父親が934人で60.2%、母親が1,157人で74.6%となっている。本稿では、3者の教育期待に関する情報が利用可能な877人分のデータを使用して分析を行った。

3.2. 変数の構成

文化資本：

父母それぞれが「クラシック音楽を聴く」および「文学作品や歴史の本を読む」頻度（5段階自己評価）および「本の数」（7段階）の主成分得点（固有値 2.7：寄与率 44.4%）。

親の教育期待：

父母それぞれが調査対象となった生徒に期待する学歴（教育年数に変換）。

出身階層：

出身階層の指標としては、父親の職業と父母学歴を用いた。父親の職業は「専門・管理」「事務・販売」「ブルーカラー（熟練・労務・農林水産）」の3分類を、父母学歴は「中学・高校・専修学校高等課程」「短大・高専・専修学校専門課程」「四年制大学・大学院」の3分類を用意した。ただし、出身階層の指標として両親の学歴を用いて回帰分析を行った場合、父学歴の方が説明力が高かったため、ここでは父学歴のみを用いた結果を示した。

なお、親の学歴は「制度化された文化資本」の指標でもあるが、芸術文化資本や読書文化資本による「社会化効果」に着目した片岡（2001）や片瀬（2004）でも、親学歴は、その効果を検討するためのコントロール要因として用いられている。したがって、それらの「直接効果」に着目した本稿もこれに倣った。ただし、こうした方法は、「文化資本」概念の再検討を要請するようにも考えられるので、「5. 考察」において改めて検討している。

選抜制度：

選抜制度に関する要因としては、「高校トラック」と「現在の成績」を用いた。「高校トラック」は、各校の進路の類似性を基準として、トラック1（大学進学希望者がほとんどおらず就職希望者が大半を占める学校）、トラック2（大学進学希望者が1～2割であり就職または専門学校希望者が3～4割）、トラック3（大学進学希望者が5割程度で就職希望者が1割程度）、トラック4（大学進学希望者が7～8割）、トラック5（大学進学希望者が9割以上）の5段階ダミー変数とした。「現在の成績」は10段階自己評価の値をそのまま用いた。

その他：

その他の統制変数として性別と「きょうだい数」を用いた。ただし、どちらも回帰分析において有意な効果が認められなかったため、ケース数を確保するため、これらを分析から除いた結果のみ報告する。

4. 分析結果

高校生の教育期待に関する重回帰分析の結果を表1と表2に示した。

まず、階層指標として父学歴を用いた表1から検討する。モデル1は、過去の同様の研究において重要な要因として取り上げられてきた出身階層、高校トラック、現在の成績を投入した基準モデルである。投入した全ての変数が統計的に有意であり、これらで全分散の6割程度が説明される。

表1 高校生の教育期待に関する重回帰分析の結果（父学歴の場合）

	モデル1		モデル2		モデル3	
	B	β	B	β	B	β
父学歴（大学・大学院）	.45	.13**	.34	.10**	.09	.02
父学歴（短大・専門）	.29	.06*	.24	.05	.11	.02
高校トラック2	.94	.16**	.93	.16**	.10	.02
高校トラック3	2.01	.46**	2.00	.46**	.90	.21**
高校トラック4	2.97	.65**	2.87	.63**	1.44	.31**
高校トラック5	3.28	.93**	3.19	.90**	1.59	.45**
成績	.07	.08**	.07	.09**	.06	.07**
文化資本			.11	.10**	.04	.04
父教育期待					.24	.23**
母教育期待					.37	.34**
定数	12.07	**	12.17	**	4.26	**
R ²	.59		.60		.74	

注)「父学歴」は「中学・高校」を、「高校トラック」は「高校トラック1」を、それぞれ基準とするダミー変数。詳細は「3.2. 変数の構成」を参照のこと。
 ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

次のモデル2は、新たに加えた文化資本変数が確かに統計的に有意な効果を持つことを示しており、文化資本の「直接効果」に着目する意義が確認される。なお、成績や低位トラックの効果がモデル1と比べてほとんど変化しない一方、親学歴と上位トラックの効果は若干弱まっており、従来、これらの直接効果として解釈されてきたものの一部は、文化資本の直接効果であったことが示唆される。モデル1とモデル2で、決定係数がほとんど変わらない（説明力がほとんど増えない）という点も、この解釈を支持していると言えるだろう。

注目すべきなのは、さらに親の教育期待を加えたモデル3において、文化資本の効果が有意でなくなる点である。しかも、親学歴の効果も有意でなくなっている。つまり、親学歴や文化資本の直接効果と見えたものは、実は親の教育期待の効果をとらえたものだったということになる。

これに加えて注目されるのが、高校トラックの効果もおおよそ半分程度に弱まっている点である。ここから、従来、高校トラックの直接効果と考えられてきた影響にも、トラックによって親の期待が異なる面が含まれていたと解釈することができる。もちろん、親の期待は子どもの所属する高校のランクにも依存すると考えられるので、因果経路の判断には慎重になる必要があるものの、非常に興味深い結果と言える。

次に表2より父職の場合を見てみると、基本的な傾向は父学歴を用いた場合と変わりなく、各重回帰係数の値もほとんど同じである。1つだけ大きく異なるのは、教育期待を投入したモデル3でも、父職の有意な効果が残る点である。ただし、それぞれのモデルにおける各職業カテゴリーの効果に着目すると、「事務・販売」職層の効果が、どのモデルでも変化しない一方で、「専門・管理」職層の効果は、モデル1 > モデル2 > モデル3としたいに低下するという興味深い変化が観察される。

表2 高校生の教育期待に関する重回帰分析の結果（父職の場合）

	モデル1		モデル2		モデル3	
	B	β	B	β	B	β
父職（専門・管理）	.69	.20**	.58	.17**	.49	.15**
父職（事務・販売）	.45	.12**	.41	.11**	.43	.12**
高校トラック2	1.11	.20**	1.08	.19**	.24	.04
高校トラック3	2.05	.47**	2.04	.47**	.97	.22**
高校トラック4	2.95	.64**	2.84	.61**	1.41	.30**
高校トラック5	3.31	.95**	3.20	.92**	1.60	.46**
成績	.08	.10**	.08	.10**	.06	.08**
文化資本			.11	.10**	.02	.02
父教育期待					.27	.26**
母教育期待					.34	.31**
定数	11.73	**	11.87	**	3.92	**
R ²	.60		.61		.74	

注)「父職」は「ブルーカラー」を、「高校トラック」は「高校トラック1」を、それぞれ基準とするダミー変数。詳細は「3.2. 変数の構成」を参照のこと。
 ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

その結果、モデル3においては、「専門・管理」職層と「事務・販売」職層の効果に違いが認められなくなっている。

これは大変に興味深い結果と言える。なぜなら、これは「専門・管理」職層の子どもが示す高い「教育アスピレーション」が、とりわけ親の教育期待が高いことに規定されていたことを意味するからである。これをふまえて改めて父学歴の場合（表1）を見直すと、モデル1とモデル3を比較した回帰係数の低下傾向は、父職の場合と同様であり、「短大・専門」層と比較して「大学・大学院」層でより大きいことが確認できる。

以上を総合すると、父職であれ父学歴であれ、上位層が示す強い階層効果の大半が、親の教育期待の高さを反映したものであったことが示唆される。SSM 調査データ等を用いた教育達成に関する研究では、出身階層の効果は、上位層と中位層の間でも明確に認められているが（荒牧 2012など）、そうした上位層の高い達成は、親の教育期待がとりわけ高いことに起因するという解釈の可能性が示されたことになる⁽⁹⁾。

5. 考察

5.1. 結果のまとめ

本稿では、高校生の教育期待に対する文化資本の効果について、従来の社会化論的な枠組とは異なる見方を提案した。1つは学力やハビトゥスの形成を経由しない、文化資本の直接効果をとらえるということであり、もう1つは、その直接効果が主として親の教育期待の効果に吸収されるので

はないかということであった。これらの予測について、高校生とその両親を対象とする調査データを元に分析したところ、以下の結果を得た。

- 1) 出身階層・高校トラック・成績などをコントロールしても、親の文化資本が高校生の教育期待に直接的な効果を持つ。
- 2) ただし、そうした文化資本の直接効果は、主として親の教育期待を反映したものである。
- 3) 特に、「専門・管理」職層や「大学・大学院」層の父親を持つ子どもが示す高い教育期待は、親の教育期待の高さを反映している可能性がある。

これらのうち1)および2)の結果は、上述の2つの予測と適合的である。したがって、従来、高校生の教育期待（教育アスピレーション）に対する出身階層や文化資本の直接効果として報告されてきたものは、主として親の教育期待と子の教育期待の関連をとらえていた（図1ではモデルcが妥当する）と解釈することができる。

ここで、高校生と母親の2者データを用いて、両者の教育期待の形成要因を同時分析した藤原(2009)は、母子の期待の関連を考慮すれば、階層要因は母親の教育期待に対してのみ独自の影響を与えていることを明らかにしている。この結果は、高校生の教育期待に対する家庭背景（特に文化資本）の直接効果として観察されたものは、主として親の教育期待をとらえたものだという本稿の解釈と整合する。

一方、3)の結果は、当初は予想しなかったものだが、CDEAの生成メカニズムに対する理解を深める上で極めて重要だと言える。第1に、この結果は、出身階層による直接効果のうち、中位層と上位層の差異を形成する主因が親の教育期待の高さであることを示唆している。と同時に、仮にこの解釈が正しければ、中位層と下位層に残された差異は、親の期待や文化資本では説明できないことも意味することになる。したがって、ここでの分析結果から判断する限り、後者の要因を説明できるような別の説明が新たに要請されることにもなる。

5.2. 「文化資本」の解体

ただし、以上のような議論を成立させるためには、「文化資本」概念について、少なくとも以下の2点から直ちに再考しておく必要がある。第1に、本稿では、「3.2. 変数の構成」において指摘したように、学歴を文化資本に含めずに分析を行った。しかしながら、Bourdieuの理論にしたがえば、学歴は文化資本の中核をなすものと言えるから、その意味では、この扱いは不適切だということになる。

ところで、親の学歴は、親自身が前の世代から受け継いだ様々な資源や資本も活用しながら——あるいは、それらの制約を受けながら——青少年期に獲得したものである。一方、本稿で親の「文化資本」の指標を構成する際に用いた音楽や本の嗜好および蔵書数は、青少年期までに獲得したハビトゥス等に影響されつつも、成人した後に選択可能なものでもある⁽¹⁰⁾。趣味と階級の明確な結びつきがないとされる日本社会では、なおさらそう言えるだろう。つまり、学歴は間違いなく地位達成や階層再生産の中核をなす要因だが、「客体化／身体化された文化資本」は、少なくともこれまで

の日本社会における実証研究を参照する限り、主として本人の学歴によって選び取られる「獲得的文化資本」(宮島 1994)の側面が強く、親から相続される側面が強く働いている様子は見えてこない⁽¹¹⁾。

もちろん、それらをすべて「文化資本」という概念でとらえ、資本の蓄積可能性と転換可能性に着目して、統合的に論じたのが Bourdieu の独創性であり、多くの論者を惹きつけた魅力であろう。しかし、文化資本が、経済資本と同じように、資本としての性格を本当に持ち合わせているか否かは、決して証明されたわけではない。というよりも、文化資本という概念自体が多義的であることに加え、長期に渡る社会化過程を通じて作用することが想定されているため、理論の適否を実証することは、そもそも極めて困難である。そう考えてみると、「文化資本」という魅力的なマジックワードを一旦解体し、様々な要因の効果を地道に検証していくことも重要なのではないかと思える。こうした主張は Bourdieu の意図とは逆行すると批判されるかもしれないが、Bourdieu 自身が理論を作り出したベースには、実証研究の積み重ねがあったことは周知の通りである。肝心なのは、Bourdieu (1979=1990)も指摘しているように、データから得た分析結果に隠された社会学的意味を注意深く考察することであろう。文化資本論を初めとする諸説明の妥当性は、そうした実証研究の積み重ねから総合的に判断されるべきではないだろうか。

再考すべき2点目は、「親の教育期待」と「文化資本」の関連である。1つの結論としては、「学歴」の場合と同様、やはり前者は後者に含まれると考えるのが正統な理解かもしれない。ただし、その場合には、文化資本の伝達(ハビトゥスの形成)を CDEA 生成の主たるメカニズムとする従来の見方とは、相容れないものになるという点には注意が必要である。もちろん、本稿の結果は、そうした面があることを否定するものではないが、CDEA の生成過程には、そうした社会化論の見方とは異なる作用、すなわち「親の教育期待」による直接効果があるというのが本稿の重要な指摘であった。その意味では、すべてを「文化資本」の概念で述べてしまうよりも、上述の通り、「文化資本」概念を一旦解体し、「親の教育期待」は「親の教育期待」として、「文化資本」に含まれる他の要素は個別の要素として扱い、それぞれの効果について実証的に確認していくことが、一見遠回りのようにも、重要なのではないだろうか。ただし、Boudon (1973=1983)が指摘したように、階層差の説明を特定要因のみに帰着する「単一的要因理論」に陥ることは避けなければならない。あくまで、日本社会で実施された調査データを用いて、各要因の示す効果を実証的に確認した後に、それらを包括的に説明できる理論を構築すべきだという主張である。

謝 辞

データの使用については東北大学教育文化研究会の許可を得ました。貴重なデータの分析をご快諾下さったことに心より感謝いたします。

註

- (1) ただし、近年における入学者選抜方法の「多様化」により面接試験等が拡大しており、こうした前提が崩れる可能性もある。
- (2) 40年以上にわたって続けられてきた Wisconsin Longitudinal Study の概要については、代表的研究者によるレビュー (Sewell et al. 2004) を参照されたい。
- (3) Sewell らのレビュー (Sewell et al. 2004) を参照すると、「重要な他者」の構成要素のうちでも特に親の期待の効果が強調されていたと読み取ることができる。ただし、その後は文化資本論などの階級文化論が着目されたためか、親の期待には必ずしも継続的な関心が払われておらず、その意味でも Wisconsin・モデルの貢献が際立つ。なお、「重要な他者」の合成指標を解体 (disaggregate) し、個別変数の効果を検討した後のモデル (Sewell and Hauser 1972 など) では、友人効果も強いことが示されているが、この観点はトラッキング研究へ引き継がれたとみてよいだろう。
- (4) 誤解のないように付け加えておくと、Wisconsin・モデルは地位達成研究の枠組において示されたものであるので、これらがさらに職業アスピレーションや職業達成に影響する点までを含んで構成されている (Sewell et al. 1969; Sewell et al. 1970)。
- (5) また、Wisconsin・モデルに限らず地位達成モデル一般に言えることであるが、それらが前提とする同質的な労働市場における業績主義的な地位達成は、白人男性にのみあてはまるものであり、アフリカ系アメリカ人や女性のように属性主義的基準が大きく関与する場合にはあてはまらないといった批判もなされた。
- (6) Kerckhoff (1976) は、また、子どもは親の教育目標 (educational goals) を誤認する (Kerckhoff and Huff 1974) にもかかわらず、Wisconsin・モデルでは、生徒の認知によって「重要な他者」の期待や計画を測定していることも問題視している。なお、本稿では、親子それぞれから直接に聴取したデータを用いているので、こうした問題はまぬがれていると言える。
- (7) 1次効果と2次効果の相対的重要性に関する実証研究は、Boudon の指摘に賛意を示すものと、そうした見方に批判的なものに分かれている。こうした判断は調査対象と具体的に採用した検討方法のいずれにも依存するが、各研究のアプローチは両面において異なっているので、結果の相違が何に起因するかを判断するためには慎重な検討が必要とされる。これについては稿を改めて検討したい。
- (8) 過去の調査との時点比較を行うために、以前の調査で対象となった学校が含まれるように選ばれており、無作為抽出ではない。その他の詳細は、第6次調査の報告書 (木村 2009) を参照されたい。ちなみに第5次調査までのデータを扱った書籍としては、全体的なまとめを行った海野・片瀬 (2008)、アスピレーション研究に特化した片瀬 (2005) などがある。その他にも多くの研究論文が発表されている。
- (9) もちろん、親の期待が高ければ必ず成功すると解釈するのは誤りであろう。かつての受験社

会論では、「教育ママ」が他のことを犠牲にしても受験競争を勝ち抜くことが大切だと考えて子どもを管理しようとする（二関 1970；田村 1981など）一方、「教育ママ」の子どもには、その弊害が認められること（二関 1971）、親の教育期待が高いと子どもはそれを満たそうとするが、実際には必ずしも行動が伴うわけではない（西川ほか 1977）こと等が指摘されている。今日でも同様の結果が得られるか否かは確かめなければならないが、冒頭のような誤った認識に至らないためには重要な指摘と言える。

- (10) SSM 調査データを用いて分析を行った大前（2002）は、「客体化された文化資本」や「身体化された文化資本」は、親から相続されたものというよりも、本人の主として学校教育経験によって獲得されたものであることを明らかにしている。また、日本における文化資本は、高学歴層が各時代の先進的な文化事象を取り入れることによって成立する「キャッチアップ文化資本」と名づけられるものであると主張している。
- (11) この点をあまり強調すると、学力形成における文化資本の効果を無視することとなり、その過程の隠蔽を暴き出した Bourdieu の意図を無にしてしまう点には注意が必要である。

文 献

- 荒牧草平, 2011, 「教育達成過程における階層差の生成：「社会化効果」と「直接効果」に着目して」佐藤嘉倫・尾嶋史章編『現代の階層社会 1 —— 格差と多様性』東京大学出版会：253-266.
- 荒牧草平, 2012, 「教育達成における階層差の発生メカニズム：『教育的地位志向』モデルによる解釈の試み」『九州大学教育社会学研究集録』13（印刷中）.
- Boudon, Raymond, 1973, *L'Inégalité des Chances: La mobilité sociale dans les sociétés industrielles*, Paris: Librairie Armand Colin. (=1983, 杉本一郎・山本剛郎・草壁八郎訳『機会の不平等：産業社会における教育と社会移動』新曜社).
- Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction: Critique sociale du Jugement*, Minuit. (=1990, 石井洋二郎訳『ディスタクシオン：社会的判断力批判 I・II』藤原書店).
- Bourdieu, Pierre et Jean-Claude Passeron, 1970, *La Reproduction: éléments pour une théorie du système d'enseignement*, Les Editions de Minuit. (=1991, 宮島喬訳『再生産：教育・社会・文化』藤原書店).
- 藤原 翔, 2009, 「現代高校生と母親の教育期待——相互依存モデルを用いた親子同時分析——」『理論と方法』24（2）：283-299.
- 藤田英典・宮島喬・秋永雄一・橋本健二・志水宏吉, 1987, 「文化の階層性と文化的再生産」『東京大学教育学部紀要』27: 51-89.
- 鹿又伸夫, 2012, 「出身階層と進学・学歴格差——階層論的説明の比較——」平成21-23年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書『ライフコース移動と男女の階層的不平等』(印刷中).
- 片岡栄美, 2001, 「教育達成過程における家族の教育戦略：文化資本効果と学校外教育投資効果の

- ジェンダー差を中心に(特集 家族の変容と教育)『教育学研究』68(3): 1-15. 259-273.
- 片瀬一男, 2004, 「文化資本と教育アスピレーション: 読書文化資本・芸術文化資本の相続と獲得」『人間情報学研究』9: 15-30.
- 片瀬一男, 2005, 『夢の行方——高校生の教育・職業アスピレーションの変容——』東北大学出版会.
- Kerckhoff, Alan C., 1976, “The Status Attainment Process: Socialization or Allocation?,” *Social Forces*, 55(2): 368-381.
- Kerckhoff, Alan C., and Judith L. Huff, 1974, “Parental Influence on Educational Goals,” *Sociometry* 37(3): 307-327.
- 吉川 徹, 1996, 「言語資本による文化的再生産: 現代日本社会における説明力と適用範囲についての一考察」『ソシオロジ』41(1): 35-49.
- 木村邦博編, 2009, 『教育と社会に対する高校生の意識——第6次調査報告書』東北大学教育文化研究会.
- 宮島 喬, 1994, 『文化的再生産の社会学: ブルデュー理論からの展開』藤原書店.
- 宮島 喬・藤田英典編著, 1991, 『文化と社会: 差異化・構造化・再生産』有信堂.
- 二関隆美, 1970, 『母親の教育態度に関する調査: 第一部いわゆる教育ママ成立の社会心理的条件』大阪大学文学部教育社会学研究室.
- 二関隆美, 1971, 「母親の教育態度と子どもとの関連: 教育ママの子はどんな子か」『青少年問題研究』19: 1-34.
- 西川和夫・石川知男・谷岡あけみ, 1977, 「親の教育態度と子供の学習意欲との関係に関する調査研究」『三重大学教育学部研究紀要』28(4): 49-55.
- 大前敦巳, 2002, 「キャッチアップ文化資本による再生産戦略: 日本型学歴社会における『文化的再生産』論の展開可能性」『教育社会学研究』70: 165-184.
- Sewell, William H., Archibald O. Haller, and Gerorge W. Ohlendorf, 1970, “The Educational and Early Occupational Status Attainment Process: Replication and Revision,” *American Sociological Review*, 35(6): 1014-1027.
- Sewell, William H., Archibald O. Haller, and Alejandro Portes, 1969, “The Educational and Early Occupational Attainment Process,” *American Sociological Review*, 34(1): 82-92.
- Sewell, William H. and Robert M. Hauser, 1972, “Causes and Consequences of Higher Education: Models of the Status Attainment Process,” *American Journal of Agricultural Economics*, 54(6): 851-861.
- Sewell, William H., Robert M. Hauser, Kristen W. Springer, and Taissa S. Hauser, 2004, “As We Age: A Review of the Wisconsin Longitudinal Study, 1957-2001,” *Research in Social Stratification and Mobility*, 20: 3-111.
- 田村喜代, 1981, 「社会階層と母親の教育態度(第四報): 母子関係における心理的特性」『東京学芸大学紀要(第6部門 産業技術・家政)』33: 137-162.
- Turner, Ralph H., 1960, “Sponsored and Contest Mobility and the School System,” *American Sociological*

高校生の教育期待形成における文化資本と親の期待の効果

Review, 25(6): 855-867.

海野道郎・片瀬一男編, 2008, 『〈失われた時代〉の高校生の意識』有斐閣.

Wilson, Kenneth L., and Alejandro Portes, 1975, "The Educational Attainment Process: Results from a National Sample," *American Journal of Sociology*, 81(2): 343-363.

The Effects of Cultural Capital and Parents' Expectation on the Educational Expectation of High School Students

Sohei ARAMAKI

A lot of previous studies regarding educational inequality have paid much attention to the notion of cultural capital. Most empirical studies which try to test the Bourdieu's theory analyze the relation between the measurable indicators of cultural capital and educational outcomes. Although the results of individual studies are not consistent, they all focus only on the effects of socialization or transmission of cultural capital, in other words, the indirect effects of cultural capital. However, it may have the direct effects on educational attainment or expectation of the students. Furthermore, referring to the findings of Wisconsin Model, the direct effects of cultural capital may not be true and may reflect the effect of parents' expectation for their child.

Using the data collected from high school students and their parents, therefore, above assumptions are investigated. The results show that these hypotheses are accepted. Despite the fact that direct effects of cultural capital on the students' expectation are certainly observed, they are regarded as the effects of parents' expectations for their child. Finally, the concept of cultural capital is discussed.